フレーベルと現代教育の理念

東京教育大学教育学部長　石山脩平

一

フレーベルその人のことを、くわしく語るためには、私の力が足りない。またそれは今日の催しの目ざすところでもないであろう。

歴史上の偉人が、真に偉人であるのは、その人の思想や業績が、現代の問題について、意味をもつており、さらに現代を未来にみちびく方向を示しているからである。私たちはここにフレーベルの歿後百年を記念するにあたり、彼の生涯をふりかえり、彼の著作をよみかえしつつ、もし彼が今日、この国に、この世界に、生きていたとしたら、何を為し何を叫ぶであろうかと考えてみる。彼が為すであろうことは実に多く、彼が叫ぶであろうことは実に高く深いものがあるにちがいない。（しかもそれらは、彼の独自の面目につらぬかれ、彼でなくては為しえず叫びえざるものとして、私たちに彼への追慕と畏敬の念をつのらせるのである。）しかも彼はすでに亡い。私たちが彼を偲んで自ら為すべきことは、彼の業績と思想を、私たちの能力と環境に応じて引きつぎ、彼をして、私たちを通じて、現代の日本と世界の課題に取り組ませることである。私たちのこうした努力が誠実であるならば、フレーベルは歿後百年にして、なお今日の日本と世界に生きていることになる。彼を記念するということは、私たちが彼を想い起すことであり、彼が私たちを通じて現代に生きることにほかならない。

祖国がおかれている今日のきびしい運命と、世界が直面している明日の不安な雲行きとに対して、私たちは、フレー

ベルの名を呼びつゝ、少くとも三つの大きな課題に取り組みたいと思う。

第一は、現実の精密な認識を求めながら、まさにそれによつて、未来の崇高な夢を描くことである。

第二は、自らの内に民族的自覚をよびさまし、熱烈な愛国心を燃え立たせながら、まさにそれをもつて人類同胞の信念に徹し、世界平和の悲願に生きることである。

第三は、こうした夢と願いを、幼な児の純情とにおいて典型的に見出し、教育という聖なるいとなみのうちに、私たちの夢と願いの実現を期することである。

この三つの課題を、私はフレーベルの業績と思想にあやかりつゝ、今日ここで、端的に率直に述べてみたいと思う。

二

フレーベルは、その修めた学問の分野からいえば、自然科学者であつた。自然と親しみ、個々の自然物、自然現象を、精密に観察測定し分析して、その根底にある理法を把握するために、飽くことなき努力を傾けた人である。ただここに注目すべきことは、外なる自然に向かう彼の心が、実は内なる自己に沈潜する心と連なつていたこと。しかもそうした事情は、彼が幼くしてぶつかつた不幸な運命に促されたものであつたということである。

フレーベルは、一七八二年四月二十一日、ドイツのテューリンゲンの森の中の一寒村オーベルワイスバツハに、牧師の子として生れた。素質からいえば、彼は潑剌とした精神、深みのある情緒、活潑は想像力をもつていた。このような子どもには、愛情に充ちた確実な教育が必要であつたのに、それが彼の家庭には欠けていたのである。母は彼が生れて九ケ月目に亡くなつた。父は六七ケ所の教区に分れた凡そ五千人の信者を引きうけて多忙な活動に追われていたので、幼きフレーベルの世話は、召使と兄や姉に任せられた。彼が四才のとき、二度目の母を迎えることによつて、しばらく幸福な生活を送つたが、やがてこの母は自分に男の児が生れると、フレーベルに対しては、まるで冷たくよそよそしい人になつてしまつた。母はフレーベルをお前（Du）と呼ぶかわりに、彼（Er）と呼んだ。「彼」—すべての人を、突つ放し孤立させる呼び名—。何よりも温かな愛情に飢えていたフレーベルは、常に、何事につけても、母の冷酷な拒絶と排斥にあわねばならなかつた。父は本来厳格で短気な気性であつた上に、今は完全に若い後妻の意のままになつていた。愛とまでいかなくとも、せめて理解してほしかつた父も、当時はフレーベルを理解してくれなかつたのである。（この父は臨終の床において漸くこの子を理解した。）

フレーベルはこうした不幸な少年期を、自ら次のように記している。「私の気持はいよいよますます引つこんでしまつた。でも自分に罪がないと思えば、自分で自分を守るほかはなかつた。外からの打撃が、はげしく耐えがたいものであればあるほど、私は自分の内的生活に満足を求めるようになつ

た。私は亡き母からの守りを祈り求めて、心の母によりすがつた。心の奥底に自分自身の生活を持つとき、それがどんなに小さなものであつても、それは私の天国をつくり出すためには十分に大きなものであつた。つまり私は外からの圧迫におされて、私の心を内へ内へと成長させ強めたのである。」

外的にはまことに惨めな家庭環境によつて、フレーベルはしかし鋭敏な感覚と直観力とを養われた。彼はこの力をもつて、一方では自分自身を深く省察すると共に、他方では外なる自然の中に融け入り、わけても植物、とくに草花に深い直観を向けて、そこに人生と同じきものを認識した。牧師なる父に身の上相談に来る多くの人々が、大ていは夫婦関係、男女問題に関する悩みやいざこざを訴えるのを聞いて、フレーベルは、人間には何故に男女の性別があるのかと思い惑つたのであるが、彼はふと花の中に雄蕊と雌蕊のあることを見て、自然もまた人間と同じであることに気づいた。外なる自然は、かくして、内に考えるこの少年を引きつけ、慰め、高め深めた。彼自らの告白によれば、「私は教会に加えて自然の宮居(テムプル)を、キリスト教的宗教的生活に加えて自然の生活を、悩み憎みあう人間生活に加えて静かな安らかな植物の生活を得た。」のであつた。

彼はすでに十才か十一才の頃、「内なる生命と外なる自然とを矛盾なく統一するところの、ある神秘的なるものを憧れ求めた。」そして外なる自然と深く結びついて生活することを理想とした。「田舎に、農場に、牧場に、森林に住む人」——これが若きフレーベルの面目であつた。

こうした形而上学的直観力と宗教的体験に支えられながらも、しかしフレーベルはあくまで精確に厳密に自然を探求した。

十五才のフレーベルは、郷里から徒歩二日行程の地、ザール河畔にあるヒルシェンベルクの林務官ヴィッツに弟子入りをして、林業を学ぶことになつたが、ヴィッツが仕事に追われて弟子を教育してくれないので、フレーベルは、自学自修するほかはなかつた。これは結果において彼に好都合であつた。彼はヴィッツの書斎で数学と語学と植物学とを研究すると共に、絶えず山野を跋渉して、森林地帯の植物を採集した。また隣の町の医者で植物研究を道楽にしていた人と交わり、その人から植物学書をもらつて、森林地帯以外の植物をも広く知ることができた。

次いでイェナ大学に学生として入学してからは、応用数学、算術、代数、幾何、鉱物、植物、物理、化学、財政学、林業、建築、測量などを学んだが、とくに鉱物の研究には大きな興味を感じた。

(フランクフルトの教職生活において、彼が担当した教科は算術、図画、地理、ドイツ語であり、中でも地理と図画とは最も好評を博した。)

ゲッティンゲン大学の在学時代に、物理、化学、鉱物、博物、天文等を研究したが、とくに自然化学に強い興味と熱意を示した。とりわけ鉱物学、結晶学においては、鉱物の世

界、結晶の世界に整然たる法則が支配していることを知り、つねに事物の統一調和を求めている彼の世界観に大きな刺戟を与えた。

ベルリン大学の鉱物館に助手として勤務していた間のフレーベルは一日の大部分を、音もせぬ一室に鉱物と一緒に閉ぢこもつた。そのとき彼にとつて、鉱物こそは、静かな、そして無限に創造的な自然の活動の無言の証人であつた。

以上に私は、フレーベルの生涯における自然科学的研究の足跡の若干をたどつたのであるが、そこには自然科学者としての彼よりも、むしろ形而上学者的な彼を見出した。

彼は草花や樹木に人間と同じ生命の法則を見ただけでなく、無生物たる鉱物にすらこれを見た。そしてこうした外的自然と内的な人間生命とは共に神性のあらわれであると彼は考えた。一つの神性が、小にしては土塊の一粒から大にしては大空の天体に至るまで同じく宿つている。無機物から植物、動物を経て人間に至るまで、発達の段階は異なるにしても、同一の神性、同一の生命、同一の法則が貫いており、それゆえにこそ自然と人間が、否さらに森羅万象が相互に理解し共鳴し合うこと——これが実にフレーベルの世界観であり宗教でもあつた。

ところでこうした世界観は、フレーベル自身の先天的素質に根ざすものであつたが、同時に、彼が接触した環境、彼の生い立つた時代の影響をそこに見のがすことができない。彼がイェナ大学に自然科学を学んでいた頃、その大学には、あの美的世界観の哲学者シラーが歴史の教授をしており、「同一哲学」のシェリングが哲学の教授をしていた。大学を去つてしばらく両親の家にいたときには、ゲーテ、ヴィーラントその他の文豪の作品に親しみ、とくに浪曼派詩人ノヴァリスの著作には最も深く共鳴した。その著作を手離すことは自分自身を手離すように思つたと自ら告白している。

これらの哲学者や詩人——むしろ哲学的詩人、詩的哲学者——に共通する特色は、自然において精神を観じ、自然と精神との同一性を観るところの浪曼主義、象徴主義であつた。フレーベルは実にかかる浪曼主義、象徴主義の時代に生れ、そうした環境に育ち、それらの人々と同じ世界観を分けもつようになつたのである。

私はそれ以上にフレーベル自身について、またその歴史的背景について、語ることを差しひかえよう。私たちは、むしろ、こうしたフレーベル的世界観の現代的意義を考えなくてはならない。

現代は複雑怪奇な時代であり、悩みと不安に充ちた時代であり、しかもそれらを解決し超克して、安らかな明るい時代をつくろうと苦しみ求めている時代である。

こうした現代において、とくに目立つ二つの方向がある。第一は自然化学の驚くべき進歩であり、第二は世界平和への熱烈な祈願である。

原子物理学の研究と原子力を利用する技術の発明は、現代の自然科学の進歩を代表すると見てよいであろう。一方また

この学問と技術とが、まず戦争のための武器として恐るべき力を示していること。それだけに平和への願いが万人の願いとして、熱烈に願われていること——これもまた現代の大きな特色である。原子物理学の進歩に比べて国際平和機構の確立がおくれていることが、現代の不安の根本原因であると思われる。アメリカとソ連とが原子兵器の製造に関しては同じ目標に向つて競争する程に熱心であるのに、平和のための方策に関しては、事ごとに対立離反して、そのために国際連合は十分な機能を発揮しえない。そこに現代の不安があり悲劇があるのだ。

ところで原子物理学を研究する学者自身は平和主義者であり、原子兵器の利用を恐れているようである。そこで私に言わせるならば、原子核の構造を研究し、そこに宿つている絶大なる力を認識することは、宇宙の神祕を探りあてる鍵であり、フレーベル流にいうならば、神性が、かくも微妙な形と力とにおいて、一つ一つの原子に宿つていることを知ることになるであろうと思う。科学は神を否定し宗教を破壊するものではなく、かえつて科学の究極に宗教を肯定し、自然法則のすばらしさに神の意志、造物主の配慮を感得させる。近代科学の父ガリレオは「われに顕微鏡を与えよ、然らば無神論を克服せん」といつたが、それこそまさに科学から宗教への道を示すものといわねばならない。

ところで原子において見出されるすばらしい法則は、やがて宇宙のすべての物質すべての現象が一つの偉大なる意志のもとに統一せられ、その意志を父として、その子なるがゆえに相互にいわば血の通つた同胞であるという世界観を当然生み出すであろう。すべてを結びすべてを融けあわせる世界観しかも同じ水準の人間の中の誰かが誰かを支配したり、物質の中の何物かが何物かを支配したりするのではなくて、水準の高い最高の神というようなものが万人を万物を支配するという世界観こそ、すべての個々の存在を平等に価値づけるところの民主的世界観である。世界平和への祈りも、明日の世界の夢もこうして科学的宗教的世界観によつて支えられなくてはならない。フレーベルを現代に生かす道の第一は実にこうした科学的にして宗教的な、平和的にして民主的な世界観にあると私は信ずるのである。

三

科学による厳密な現実認識から崇高な夢を描くという第一道に対して民族的自覚、愛国心というようなものから、人類同胞の信念に徹し、世界平和の悲願に生きるという第二の道——これがまたフレーベルの生涯と思想が私たちに教える重要な一面である。

ナポレオンの馬蹄に蹂躙されたドイツ——そこには民族の自覚、祖国の独立への願いが勃然として起つた。フィヒテはあの深い思索と厳密な論理と熱烈な愛国心をもつて、前後十四回にわたる連続講義——『ドイツ国民に告ぐ』という大講演を行つて、理性の哲学に基づく世界史的観点から、ドイツ

民族の使命を論じ、新しい教育による祖国の再建を提唱した。シュライエルマッヘルは、教会に義勇軍を集めて、フィヒテに劣らぬ愛国的講義を行つた。私たちのフレーベルはさらに進んで自ら武器をとり、義勇軍の一兵卒として、戦場を前進したのである。

しかもフレーベルのこうした勇敢な実践は、教育に志す青年としての独自の決意によつて行われた。彼に云わせるならば、自分がこれから教育しようとしている児童は、祖国をもちながら武器を執ることができない。児童自身の力では祖国を守ることができない。こうした児童のために祖国を守ることは青年の義務である。苟も武器を執りうる青年が児童と祖国とを、血と肉をもつて守りもしないで、しかも児童の教師となりうるなどとは、自分は全然考えることができない。いま卑怯にも怖れ退くような青年が、後に赤面することなく、また児童の嘲笑と軽蔑を受けることもなくして、彼等を自らかの偉大なる事柄や、献身犠牲を要求する事柄に感激させうるなどとは、私には考えることができない。——これが彼の決意を促した事情であつた。

しかもこうした決意と実践は、決して単にドイツのみの自由のためではなく、また戦争への狂熱によるものでもなかつた。むしろ、いま戦争に参加することは、戦争という人類共通の苦悩を克服するためである。人類共通の危険を駆逐するために自己の義務を果しもしないのは、威厳のないことであり、男らしくないことである。——こう感じたと、フレーベルは自ら告白している。

私たちはここでも、ドイツ民族とその祖国とを愛するフレーベルの心が、その実は民族愛を通じ祖国愛を通じて、全人類への愛に連なつていることを見る。宇宙の万物万象に同じ神性を宿すことによる共通法則を認める彼が、人類共通の苦悩と危険の克服のために立ちあがつたのは、あまりにも当然と云わねばならない。

民族的自覚と愛国心とに起ちあがつたドイツは、やがて普佛戦争に勝ち、カイゼル治下の強大国ドイツを実現した。それはフレーベルの思想を一部分実現したけれども、その全部を実現せず、とくに最も重要な点を実現しなかつた。ドイツもフランスも、その他すべての国々も、同一の神性を宿すことによつて平等であり、同胞であると考えるフレーベル的世界観のかわりに、ドイツ民族のみが神の意志を奉じて存在するものの如く考え、ドイツ至上主義（Deutschland ueber alles）を公言することによつて、カイゼル治下のドイツは第一次世界大戦を惹き起し、ついに敗北してしまつた。

その後のドイツは、一時的には、かつてシュライエルマッヘル、フィヒテ、ゲーテ、ノヴァリス、そしてフレーベルなどによつて築かれた気高く大らかなドイツ——浪曼主義、象徴主義、新人文主義のドイツ——を再現するかのごとくに見えた。そこではフレーベルも、オイケンやフォルケルトやシュプランガーなどによつて、研究せられ呼びかえされた。

しかしながら間もなくナチスの嵐が、この咲きかかつた花

を散らして、傲慢な独善的な民族国家主義のドイツをつくつてしまつた。神の支配に従う諸民族に同胞として手を結ばせようとしたフレーベルの理念のかわりに、ひとりドイツ民族のみが神に代つて他の諸民族を支配しようとする民族国家至上主義が臆面もなく振りまわされた。ヒットラーをめぐるナチスの指導者たちによつて、フレーベルは何らの尊敬をも払われなかつたのである。

それゆえに私たちは、今度こそフレーベルを力強く呼びかえさなくてはならない。私たちが求める新しい世界秩序においては、いかなる国家も平等の独立国家、主権国家であるがしかしまたいかなる国家も絶対の独立、絶対主権を持つてはならない。すべての国家は、共通の理念、共通の法則によつて支配せられながら、しかもそうした共通の理念、法則を各国独自の姿において実現するものでなければならない。個々特殊のものが共通普遍のものを、独自の姿において実現する——そこに個性が普遍性に支えられ、普遍性が個性に具体化するという新人文主義的、フレーベル的世界が成立するのである。国際連合のごときは、こうした意味での新しい世界を目ざしているのである。

今日、私たちは科学者による平和運動がさかんに展開されているのを見る。そこでは科学の成果が戦争に悪用されてはならないと警告せられ、また科学の研究が戦争によつて妨げられてはならないと訴えられている。しかし平和というものが、このように、科学の成果の使いかたや、科学の研究の条件に関して、要求せられるだけでは足りないと思う。むしろ科学の証明する真理そのもの——すなわち、あくまでも精細に厳密に、個々の事物、個々の現象を探求して、それぞれの実相を明らかにすると共に、そうした個々の事象が、普遍的法則に、神の意志に、支配せられることによつて、整然たる世界秩序が成り立つていることを明らかにし、そこに個と普遍とを共に尊重する科学的宗教的世界観を確立し、これによつて、世界平和の基礎を、まさに科学的宗教的に確立しなくてはならない。これこそフレーベルが見た世界のありかたである。彼はこうした眼をもつて、歿後百年の今日の世界を厳しく見守つているのである。

四

フレーベルは、家庭の事情により、早くから就職の必要に迫られていた。さきに述べたような自然科学方面の研究も、直接には就職を動機として行われたのである。二十三才の頃友人の紹介によつて、フランクフルトへ行つたのも、建築家になりたいという強い希望に促されたからである。

それにも拘らず、彼の心の底には、自ら明かに意識しないほどそれほど深く、人間教育への関心が潜んでいた。建築家としての就職口を待ちながらも、彼は何か割り切れない気持で、自分自らに問うのであつた。「一たいお前は、建築術によつて、どうして人間としての甲斐ある活動ができるのか、またどうして人間の教育と向上とに尽すことができるの

か。」――

こんな悩みと不安を抱いているフレーベルを、友人は偶然にも、ペスタロッチー学徒なるグルーナーに紹介した。グルーナーは当時フランクフルトに創設せられたモデル・スクールの校長であつたのである。グルーナーは卒直に忠告した。「あなたは、建築業はおよしなさい。それはあなたには適しません。教師におなりなさい。私の学校に一人欠員があります。御同意でしたらその地位をあなたに上げます。」フレーベルはこのようにして、フランクフルトのモデル・スクールの教師となり、そうした縁故から、彼は三日後には、イヴェルドンにペスタロッチーを訪ねた。この最初の訪問は僅かの日数であつたが、深い感銘を受け、あらためて長期の研究を予定して、一先ずフランクフルトに帰り、教職に従事した。彼は九才から十一才までの男児三四十名の学級を担当して算術、図画、地理、ドイツ語を教えたのであるが、その最初の喜びを、兄クリストフに報告して次のように述べている。

「私は、何かしら、自分でも知らなかつたもの、しかも長く憧れ長く見失つていたものを発見したような、またとうとう私の生命の根底を見出したような気がしました。私は水中の魚、空飛ぶ鳥のように幸福です。」

こうして天職を発見したフレーベルは、その後、家庭教師として教育生活を続け、その教え子三人をつれて再びイヴェルドンにペスタロッチーを訪ね、その学校の生徒と生活を共にしつつ、ペスタロッチーの教育法を研究した。

フレーベルはペスタロッチーの教育法に対し、多くの点で共鳴し、それを讃美したが、唯そこに幾らかの不満をも感じたらしい。それはとくにペスタロッチーの教育法に外的な全面性と完全性とが欠けており、内的な統一性と必然性とが欠けていると感じたことである。察するところ、ペスタロッチーの教育には可なり分析的、論理的、機械的な色彩があつたようである。もちろんそこには道徳的、宗教的なものもあつた。しかしあえて言えば芸術的なものが欠けていたのではあるまいか、知的、道徳的宗教的であつても、芸術的でないならば、どこか潤いがなく、ゆとりがない。外的な全面性と完全性、内的な統一性と必然性というようなものは、本来芸術的なものにおいて、最もよく具わるものだからである。そしてこうした方面の教育は、とりわけ幼児の教育において最も自然にあらわれてくる。

教育に天職を見出したフレーベルが、さらに教育活動の焦点を幼児教育に集中してきたことは、思えば偶然ではなかつた。

幼児の生活、あらゆる真実を、直観的に把握し直観的に表現する幼児、有限な事物によつて無限なものを表現し、物的なものによつて精神的なものを表現し、地上的なものにおいて天上的なものを表現する幼児、つづめて云うならば、何よりも浪曼主義的、象徴主義的な特色に彩られている幼児の生活―これこそは、フレーベル的世界観を、素朴に自然に、しかも典型的に証明するものである。フレーベルが幼児の教育

に関心を焦点づけ、とりわけ幼児の遊びとその遊び道具としての「恩物」を、深い根拠から工夫考案したことは、当然と云わねばならない。

いわゆる幼稚園の創設に関する有名な話は、あまりにもよく知られているので、ここには省略しよう。唯ここで、私たちが陥りやすい一つの誤解を、念のために警戒しておきたい。

フレーベルが「幼稚園」（Kindergarten）として夢みたのは、町の一隅や学校の一隅に、小さな一劃を設けて、幾十人かの幼児が保育されるところ、いわゆる幼稚園ではなかつたようである。少くともそうした幼稚園を彼は考えついたのではなかつたらしい。

むしろ、さしあたり、ドイツのすべての家庭が、神の恵みにより、したがつて（また自然と人生との共通法則によつて）母愛と父の心づかいとによつて、幼児を正しく、のびのびと育てあげること――いわば全ドイツの家庭を子どものための花園とすること――これがフレーベルの願いであつた。ブランケンブルグに創設された幼稚園は、この意味において、全ドイツの家庭のモデルを示し、望ましい家庭教育のセンターたらしめるためであつた。その名を「一般ドイツ幼稚園」（Der Allgemeine deutshe Kindergarten）と名づけたのも、こうした趣旨であると想像せられる。

だからこの幼稚園の背景には、全ドイツの母親、全ドイツの女性に呼びかけ、彼女たちに手を結ばせようとする「婦人連盟」も考えられていたのである。

しかも神の恵みは全世界にあまねく、自然と人生との共通法則は、全世界の自然と人生との共通法則であるかぎり、そこに当然にドイツを超えて全世界にひろがる幼稚園が予想せられねばならない。

「人類よ、神の園なる家庭において、園の百合のごとく、新鮮に明朗に、生い立て！」フレーベルが彼がその主著『人間教育論』（Menschenerziehung）の表紙裏に記したこの言葉は、実に全世界を人間教育の花園たらしめようとする祈りがこめられていたのである。

これこそ彼が現代に生きる第一、第二の道が第三の教育の道に具体化したものにほかならない。しかも幼き自分が最も強く求めて得られなかつた家庭の愛と温かみとを、彼は全世界の人々のために求めているのである。

五

以上に私が語つたところは、あまりにもロマンチックであつて、リアルではない。と批評せられるであろう。ロマンティケル、フレーベルを語るのに、ロマンティックであるのは当然ではないか。と云つてしまえばそれまでである。しかし私は現代教育の理念を語るためにこそ、わざとロマンティックに考え語つたのである。理念は現実ではない。現実を超えて高く末来に掲げられる目標、遠く末来を指し示す方向、これがまさに理念の本質である。しかもそれは現実から全くか

けはなれた空想ではない。現実の中にはたらき、現実を導いて一歩一歩、前進させるところの生きた力である。

科学の進歩によつて個々の事象をますます精密に認識しながら、まさにそれによつて宇宙に遍満する普遍的法則を把え、神の意志に結ばれること、個々の民族、個々の国民が平等に独立と自主とを保ちながら、同じ神のふところに抱かれて同胞愛に結ばれること――そのような世界を、人間教育の花園として打ちたてること。こうした意味での真に民主的平和的な世界の実現は、決して空想ではなくて理念である。現実の世界がそれに遠ければ遠いだけ、現実が一歩一歩それによつて導かれ前進すべき目標、方向としての理念である。

この理念を、もし空想と嘲る人々があるならば、私たちはその人々から袂を別とう。その人々というのは、多分、あまりにも現実的な大人たちであろう。遠く高き理念を、まじめに追求するには、あまりにも生い先きの短い大人たち、その人たちのことは、もう断念して、生い先きの長いこどもたちに手をさしのべよう。何よりもロマンティケルたることを特色とするこどもたちこそ、理念を求めるにふさわしいものだからである。

だからフレーベルは、幼児教育に関心を焦点づけたとき、一八三七年八月一日の日記に、次のごとく記した。「そうだ吾々はこどもたちに生きようではないか」(Kommt lasst uns unsern Kindern leben!)。その同じ言葉が、今もなお彼の墓標に刻まれている。「そうだ、吾々はこどもたちに生きようではないか。」

これをもつて私の拙き講演を終る。

(特に執筆を謝す。編集者)

新發賣

お茶の水女子大学
付属幼稚園　主事　及川ふみ先生御考案

たのしいおしごと（九月下旬）

B5四色刷美本・内容十六枚
定價　四五圓・送料　六円

大変御好評を頂いた「えとぬりえ」を御考案された及川先生が、またまた日本の子供のために、たのしいおしごと」を御考案下さいました。これはぬりえのもつ教育的価値と「おさいく帳」のもつ指導性とを渾然と一体化して一つの「おしごと」にまとめ上げた劃期的なものです。必ずや手にとられてこれはすばらしいとおほめ頂けることゝ存じます。

幼児に創造力を與える保育新手技材料

ウツド・カラー（色へ合せ）

自己創造にたえまない幼児の手技材料として劃期的革新的なものであるとして多権威者から絶大の御賞讃をいたゞいております。

1　型は丸一種ですが大小色彩の組合せで玩具・動物・
2　植物・模様何でも出来る。
3　薄い経木に着色したものですから原型色彩が変化しない。
4　糊をつけないで多種多様に並べている中に好きなものができる。
5　自然の中にたのしみながら創意工夫を養う。

おさいく帳「えとぬりえ」等にも併合出来る。

至急各代理店にお問合せ下さい現物一本及び参考品を持参いたします。

東京都千代田区神田神保町二ノ四
株式會社　フレーベル館